

第11話:弱音ハクの泣血

(1)

新月の闇の中、狂気のコンサートが、繰り広げられている。
そんな中、ハクは見知った顔を見つける。たしか、以前に倒した相手だった。名前は、唱太といった。懐かしい名前だが、今のハクには、なぜ懐かしいのかがわからない。隣の女性は初対面だが、敵意がないので、とりあえず、気にしないことにした。

「 どう戦うの？メイコさん？ 」

「 ミクと共に戦うときと同じでかまわないわ。」

「 でも、ミクのコントローラしかないですよ。」

「 何？もしかして、貴方たち、ずっと、マニュアルモードで戦っていたの？ 」

呆れたように、メイコが言うと指示を出す。

「 コントローラのコンソールパネル。C2 のマイナー。」

言われたとおりに弾くと、コンソールパネルが唱太の目の前に浮かび上がる。出ましたと、メイコに告げる。

「 その APA のプロパディから、所属タブを選んで… 」

言われたとおりに、所属タブを開くと、ミクのシリアルナンバー APA_010005 が、入力してある項目の下に、同様の項目が空欄のまま六つつ、縦に並んでいる。

「 ミクのシリアルナンバーがある下の項目に、私のシリアル・ナンバー。APA_010003 を入力して、適用ボタンを押して閉じる。 」

ちゃんと入力されたか、チェック大丈夫なようだ。戦闘態勢に入る。

「 唱太君。いくわよ 」

「 ああ！ 」

メイコは、思考トレースをセミオート状態にして、ハクの思考をトレースする。
微かに、珀世の意識を感じて、そこに賭けてみることにする。何か、彼女を覚醒させるものが見つかれば、そう思い、作戦を練る。ノイズの汚染が、かなり進行
していて半端なレベルの技では効きそうにない。今、私が持っている最高レベル
の技でなければ、無理だろう。二度と使いたくはなかったのだが、仕方がない。

「 できれば、使いたくなかったんだけど…。仕方ないか。 」

そして、わずか、コンマ 1 秒で、それを見つけ出し、唱太に告げる。

「 唱太君。お母さんの歌は好き？ 」

「 ええ。そういえば、
子供のころよく歌ってくれた曲が… 」

「 その曲を弾いてみて。 」

「 わかりました。 」

唱太は、子供のころよく聴いた曲を奏ではじめる。その曲の名は…。

(2)

唱太の思い出の曲を BGM に、一瞬で準備を整え、メイコは唱えた。

「 第七位。能天使奏楽(カシエル・ノート)ガリツオー。 」

メイコの歌声と、ともに奇妙なことが、ハクの身に起こった…。
朱色のオーラが展開し、敵味方問わずに包み込む結界が形成される。
ハクは異常に気付き、攻撃に移ろうとするが、時すでに遅く、加速度

的な時間の中で、囚われた状況になる。つまり、ハクの時間だけが、停止した状態になったのだ。それから、ハクの姿が、早送りのように珀世の姿へと変わり、唱太の子供のころに見た珀世の姿までに若返ると、再び、元のハクの姿に戻る。まるで、事象の地平線を見ているように。

「アーカシックレコードの読み込み、終了。」

そのハクの身体から、光の五線譜が同心円状に展開し、勝手に記譜していく。メイコは、その楽譜を見ながら、事務的に続けて、

「曲に変換します。」

メイコは、曲調をかえて、あの頃、珀世が唱太に歌った歌を歌いだした。ハクは、その曲に心の奥を揺さぶられる思いがした。思えば、あそこから、自分は始まったのだ、自分はあのとき本気で歌うたいになろうと思ったのだ。涙が、ただの涙ではない。紅い血の涙が、その人間性を失った双眸から流れ落ちる。思わず、珀世の声で慟哭する。違う、こんなことしたいんじゃない！と、強く思った。楽園の悪夢から覚めかけて、現実を見つめる彼女が蘇ろうとしていた。そして、その期を逃す、メイコではなかった。

「今よ、唱太君！」

「わかった。」

唱太は、母親への思いを込めて演奏する。メイコの展開した朱色のオーラが、まるで、スポットライトのように収束して、メイコは息を吸い込むようにそれを吸収する

「サンプリング終了。補正、および、
トランスポーズ完了しました。フェイズ 4 に移行します。」

メイコは、目を閉じて、精神を集中させる。唱太はなおも気持ちを込める。

再び、ハクの身体が、抵抗を諦めた、彼女の真上から降り注ぐ、朱色のスポットライトに包まれていくと、マイクの LED が、オールグリーンになった。必殺技の準備が完了したことを示す、マイクの LED が、オールグリーンの状態から、オールイエローにかわり、エーテル残量チェックの後、5分間のカウントダウンが始ま

る。

「 CNR.フェイズ 2 に移行。第6位から第4位使用可能。システム、作動します。」

「 第五位。主天使奏楽(ドミニオン・ノート)・チャミュエル。」

そして、無原罪の素体から繰り出される、準光速のエーテル波の歌声に、干渉を受けたノイズは、
断末魔をあげる間もなく、目映い虹色の光のまっただ中で、メイコの歌で、生きる希望を取り戻した珀世に、
干渉する力を失い、完全に消滅していった。その後に残ったのは、呆然と立ちすくむ珀世のみであった。

唱太は、涙の後の残る母親に駈寄り、抱きしめた。珀世も、息子をいとしげにいただき
つづける。いつまでも、悔恨の思いでいただきつづける。

《 つづく 》